特集展示

# 百萬遍知恩寺の名宝

FEATURE EXHIBITION

TREASURES OF HYAKUMANBEN

## CHION-JI TEMPLE

AUGUST 7 — SEPTEMBER 9, 2018

The temple of Chion-ji, located at the Hyakumanben intersection on the east side of Kyoto, is one of the seven major Pure Land (Jōdo Shū) Buddhist temples established by the sect's founding priest Hōnen (1133–1212).
The name Chion-ji, "Temple of Wisdom and Blessings," came from its second abbot Genchi (1183–1239). Chion-ji is home to numerous important works of art, including the Chinese masterpiece *Hama and Tieguai*, by Yuan dynasty painter Yan Hui, which is an Important Cultural Property of Japan.
This exhibition includes findings from the Kyoto National Museum's recent inventory of Chion-ji's collections. Enjoy the artistic treasures of Pure Land Buddhism, a religious tradition with deep roots in Kyoto.

平成 30 年

8月 7日 火 …9月 9日 日

京都国立博物館

平成知新館 2F-1～5

KYOTO NATIONAL MUSEUM

# 名宝を受け継ぐ

京都市を南北に流れる鴨川の北東に堂宇を構える百萬遍知恩寺は、浄土宗七大本山の一つです。宗祖の法然上人（一一三三～一二一二）が開基となり、上人の高弟で第二世となった源智上人（一一八三～一二三九）が「知恩寺」と名づけました。元弘元年（一三三一）、第八世の善阿空円上人が後醍醐天皇の勅命を受けて七日間百万遍の念仏を修し、都に蔓延していた疫病を除いたことから「百萬遍」の寺号が授けられました。中世には公武ともに崇敬を受け、近世には江戸幕府からも庇護を受けています。

「百万遍」は知恩寺が面する東大路通りと今出川通りの交差点にその名をとどめ、向いにある京都大学吉田キャンパスとともに京都の人びとに親しまれています。しかし、同寺が現在の地に移ったのは江戸時代の寛文二年（一六六二）のことです。「賀茂の禅坊」という賀茂社の神宮寺として御所の北側、現在の相国寺のあたりに建立されて以来、幾度か移転を繰り返してきました。鎌倉時代の仏師・快慶の作の可能性が示された「阿弥陀如来立像」をはじめ、「十体阿弥陀像」や「善導大師像」、「蝦蟇鉄拐図」など計六件の重要文化財（建造物は一件九棟指定）をふくむ、総計四百件を超える浄土宗美術の名宝を擁する大寺院にとって稀有なことです。

いかに名宝を散逸させることなく受け継ぎ、そして後世に引き継いでゆくのか。知恩寺には「知恩寺歴代略伝（宝物録）」という二冊の冊子が残されています（本展No.37）。これはいわゆる「宝物台帳」で、寺が所有する什宝の名称、形状、数量や重要と思われる釈文などを記し、ときには寺に施入されたときの状況なども細かく記録しています。たとえば、下冊の「七難七福図巻」は天明七年（一七八七）に豪商「桔梗屋」が寄進したことが記されています。また、「蝦蟇鉄拐図」は享保十六年（一七三一）に幕府で「御上覧」されたことがわかります。

「宝物録」は江戸時代以降、幾度か書き改められてきたのでしょう。現在のものは後期以降に清書されたものと思われます。「宝物録」を寺院運営の根幹をなす文書のひとつに位置づけ、名宝を苦心して守ってきた先人の思いを今に伝えているのです。

このことは、平成二十九年（二〇一七）に開館百二十周年を迎えた京都国立博物館（京博）にとっても、大いに学ぶところがあります。京都を中心とした寺院や神社に伝わる文化財の調査・保存・研究・展示を使命とする博物館として、知恩寺の取り組みは文化財保存の先達として範を示しているからです。

京博では平成二十年度（二〇〇八）から、「宝物録」をもとに寺が整理した台帳を手がかりにすることにより、可能な限り同寺が所蔵する文化財を調べる「悉皆（しっかい）調査」を行ってきました。彫刻での新知見（淺湫コラム参照）や、近世の浄土宗美術の優品はもちろん、京都画壇を代表する円山応挙（一七三三～一七九五）や、近年再評価が高まる近江出身の高田敬輔（一六七四～一七五六）の作品も確認されました。調査の成果の一部は平成二十三年春に法然上人八百年遠忌を記念した「法然」展で紹介し、平成二十八年には『社寺調査報告書』を刊行しました。

本展が社寺を対象とした当館の学術調査の成果の一環として京都に根差した浄土宗美術の精華に親しむ機会となることができましたら幸いです。（呉孟晋）


● 参考文献
覚保編集「長徳山知恩寺歴志略」（『大日本仏教全書』所収）
「百萬遍知恩寺誌要」『浄土宗全書』第二十巻（第十輯寺誌宗史）、浄土宗典刊行会、一九三一年
『法然：生涯と美術』展図録、京都国立博物館、二〇一一年
『社寺調査報告』第二十七号（知恩寺）、京都国立博物館、二〇一六年

上● 重要文化財
百萬遍知恩寺 御影堂（大殿）
右● 重要文化財
百萬遍知恩寺 総門（山門）
左● 知恩寺 調査風景

第一章

# 宗祖の教え

中国・南北朝時代に広まった浄土教は、唐時代に善導（六一三～八一）が大成し、日本に伝えられました。そのため、浄土宗の宗祖・法然上人（一一三三～一二一二）にゆかりの深い知恩寺では、「善導大師立像」や「善導大師像」（重要文化財）、「浄土五祖像」など、歴代の祖師にまつわる彫刻や画像の名品が充実しています。江戸時代までに歴代住持の肖像画が全部で約五十点もそろえられたことも、法然上人の教えが脈々と受け継がれてきたことを示しています。

＊掲載作品はすべて京都・知恩寺蔵です。

## 浄土五祖像

中国浄土教の五祖師を表し、中央が開祖曇鸞、向かって右手前が道綽、左手前が善導、後右が懐感、左が少康とみなされる。法然が入宋僧重源に依頼して輸入したと伝わる二尊院所蔵の中国画の図像に倣うが、中国にこの五祖の組み合わせは見られない。日本への図像請来後、おそらくは法然教団において定められたと考えられる。後世流布する祖師像の初期転写例として重要。（井並林太郎）

## 法然上人鏡御影

絵を得意とする勝法房が師・法然の肖像を描き賛を求めたところ、法然は鏡を左右の手に持ち水鏡を前に置いて頭頂の形を確かめ、異なるところに絵具を塗り直したという。法然像のうちこの説話に仮託されるものを「鏡御影」と呼び、金戒光明寺にその現存最古本が伝わる。「鏡御影」はもっとも流布した法然像であり、小幅の本図もその一例である。絹目の様子や、顔貌の線描などから、桃山期に近い室町末期の制作と考えたい。（井並林太郎）

画像提供：奈良国立博物館

## 重要文化財 善導大師像

浄土教第三祖善導（六一三～八一）の御影。彼が念仏を唱えると口から仏が出現したという、上部の賛にも記される場面を表す。この賛は「紹興辛巳」すなわち南宋・紹興三十一年（一一六一）の年紀を有し、本図が宋画の写しである可能性を示している。代表的な善導像であるのみならず鎌倉時代肖像画中の優品といえ、袈裟の精緻で華麗な截金文様などに見所がある。（井並林太郎）

巻首

## 知恩寺歴代略記

知恩寺初代の法然より、四十一世の玄誉円冏（一六三四～一七〇六）まで、歴代住持の事績を記した重要な作品。元禄三年（一六九〇）の奥書によれば、寛文元年（一六六一）の火災により、既存の寺誌が焼失したことをうけ、これを歎いた円冏が過去帳や系図などから編集させたといい、なかには文書の類も写しとられている。文中には元禄十年までみえることから、随時、増補がなされたと考えられる。（羽田 聡）

# 第二章 浄土の世界

法然上人が開いた浄土宗の教えは、念仏により阿弥陀如来の極楽浄土に往生するという衆生の救済にあります。知恩寺には、浄土の世界を表した「浄土曼荼羅図」や「十体阿弥陀像」（ともに重要文化財）といった仏画はもちろん、近年、鎌倉時代の仏師の快慶の作であるとの新説が示された「阿弥陀如来立像」をはじめとする彫刻もそろっていて、まさに浄土宗美術の宝庫といえます。中国や朝鮮からもたらされた請来品も豊富にあり、東アジア地域での仏教美術のひろがりを知ることもできます。

## 重要文化財 浄土曼荼羅図（当麻曼荼羅図）

当麻曼荼羅は模本が多いが、これは一つ最大の特色をもつ。下縁の九品来迎図がそれで、他の諸本と全く異なる。原本の下縁は、鎌倉時代初頭にはぼろぼろになっていたが、その復元のために当時流布していた別系統の観経変を参考にしたと考えられる。上品下生に帰来迎を描くのは平等院鳳凰堂扉絵と同じで、坐像という古式も考えると、平安時代に京都で流行した観経変のなごりを示す貴重な作品といえる。（大原嘉豊）

巻首

## 絵入阿弥陀経

鳩摩羅什訳。阿弥陀仏の浄土と、そこへ生まれる方法が説かれる。浄土宗において『無量寿経』『観無量寿経』と共に「浄土三部経」と称される重要な経典。本作品は、中国明時代の木版印刷。下段に経文を摺り、上段にその内容を絵画化したものを配す。奥書によれば、永正一七年（一五一七）に百萬遍知恩寺第二十五世、伝誉慶秀に寄進されたことが知られる。（上杉智英）

## 阿弥陀如来立像

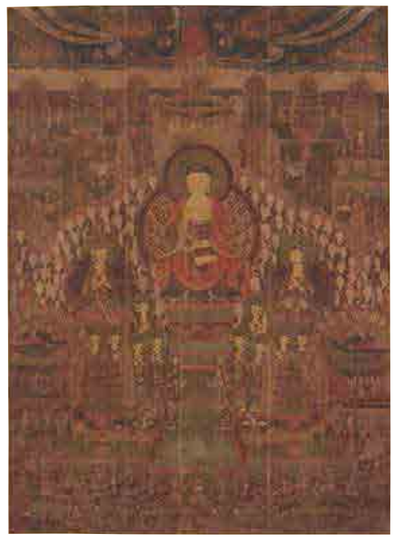
いわゆる三尺阿弥陀とよばれる大きさの像で、来迎印を結んだこのような姿の阿弥陀立像は仏師快慶が得意としたことから、彼の若いころの名にもとづいて安阿弥様とよばれる。本像は京都・遣迎院や奈良・西方寺の快慶作阿弥陀像と共通するところが多く、快慶あるいはその工房に属する仏師によって製作されたと考えられる。内部に納入品がある。（浅湫 毅）

京都国立博物館では長年にわたって、継続的に社寺調査をおこなってきました。それら調査では数多くの発見があり、のちに国宝や重要文化財に指定されたものもあります。この阿弥陀如来をCTスキャナーで調査したところ、内部に巻物とみられる納入品があることがわかりました。今回の知恩寺の特集展示も、このような当館の調査成果にもとづいています。（浅湫 毅）

## 広疑瑞決集 巻第四

敬西房信瑞

法然の孫弟子、敬西房信瑞の著述。建長八年（一二五六）成立。全五巻。上原敦広の疑問を信瑞が解決する問答集。浄土教義や殺生と念仏、神仏の関係などが説かれる。百萬遍知恩寺の中興の祖、第三十九世満霊光誉の識語によれば、第二世勢観房源智の自筆本として伝えられる。巻四のみであるが『広疑瑞決集』の現存最古写本として貴重な一冊。（上杉智英）



## 阿弥陀浄土変相図

阿弥陀如来の浄土世界を描いた変相図は、中国の唐時代以降、寺院の壁画に盛んに描かれ、朝鮮にも伝わった。本紙の縦で二メートルを超す本図の大きさもそれに由来するのであろう。左下隅にある願文は金泥で書かれており、冒頭にある中国暦の「宣徳拾年」から朝鮮時代の世宗十七年（一四三五）に奉納されたものであることがわかる。（呉 孟晋）

## 阿弥陀三尊像

中尊の阿弥陀如来の左に観音菩薩、その右に勢至菩薩を配した三尊像。中尊は左右手ともに一・三指を捻じった来迎印を結んでいる。旧箱の蓋には、江戸時代のものと思われる「子教釈迦三尊」の墨書があるが、「子教」とは同音の「思恭」を指すのであろう。古くから日本では本像のような流麗な高麗仏画を張思恭筆の宋元仏画とみなしてきた。（呉 孟晋）

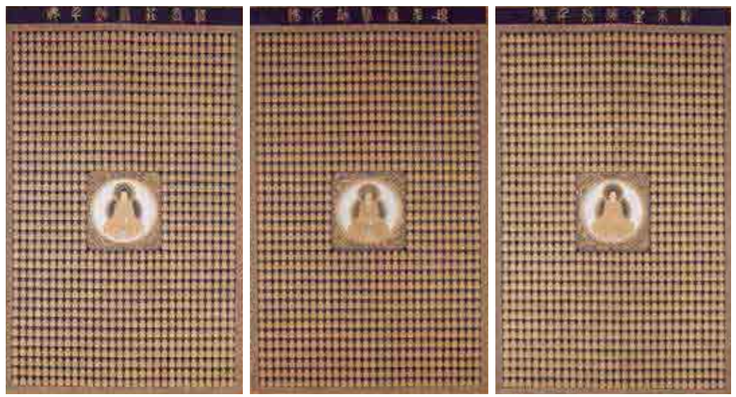
## 刺繍阿弥陀三尊来迎図

臨終に阿弥陀仏があらわれ極楽浄土へ迎えとられることは、末法の世の人々の強い願いであった。そのため、身近に掛ける小ぶりの来迎図が数多く制作されることとなり、それは刺繍によっても表現された。一部には刺繍糸の代わりに髪の毛が用いられ、発願者の深い祈りを伝えている。（山川 曉）

## 重要文化財 十体阿弥陀像

伝恵心（源信）筆

さまざまな印を結び、飛雲に乗って緩やかに降下する十体の阿弥陀像を描いた珍しい図で、台座両側に垂下する両袖、台座の装飾などに宋画の影響が強く出ている。諸尊の顔は秀麗で、衣の彩色も変化に富んで美しい。定印を結ぶ阿弥陀を除く九尊は伝恵雲僧都請来の「九品往生曼荼羅」の九品仏に一致し、深い関連が想定される。（大原嘉豊）



## 三千仏図 神田要信筆

三千仏は、年末に過去現在未来の諸仏に罪業を懺悔する仏名会の本尊である。本図はもと東京本所の霊光寺に伝来し、明治二十三年（一八九〇）に知恩寺に寄付された。軸裏書に、元文四年（一七三九）から延享元年（一七四四）にかけて神田要信が描いたとある。徳川将軍家の菩提寺である江戸寛永寺の御用絵仏師であった神田家絵所の流れを汲む人物であることは間違いないが、第九代当主神田宗庭藤原要信（一八二六～七五）とは生没年が齟齬しているため、別人物であろう。神田家絵所当主は、宗庭の法号を歴代継承していた。（大原嘉豊）

# 第三章 所縁の名宝

知恩寺は、中世から近世にかけて公武ともに厚い信仰を受けてきました。そのため、仏教美術だけではなく、工芸品を含むさまざまな宝物が寄進されました。室町時代の公卿で八代将軍足利義政の正室となった日野富子の兄・日野勝光（一四二九～七六）や徳川家康（一五四三～一六一六）をはじめ歴代の徳川将軍の肖像画もそろっています。また、奇想天外な仙人の姿を描いた「蝦蟇鉄拐図」（重要文化財）は中国・元時代を代表する人物画家の顔輝が描いた、数少ない真筆として世界的に知られています。

## 水月図　円山応挙筆　三宅嘯山賛

水面に映るいくつもの月影が波間にゆらめく様子が、外隈の手法によって描かれている。裏面の寄進銘によれば、本作は糺の森での納涼の折に画家が見た光景にもとづくものという。賛の五絶は俳人・儒学者の三宅嘯山（一七一八～一八〇一）が寛政元年（一七八九）に記しており、嘯山門下の俳人・季遊（佐々木有則）がその十年後に知恩寺へ寄進した。（福士雄也）

## 双鶴図　高田敬輔筆

高田敬輔（一六六二～一七五五）は近江日野生まれの画家。狩野永敬、のち古磵明誉に学んだ。曾我蕭白の師とも伝えられる。いかにも京狩野の画家に学んだらしいコントラストの強い筆墨により、竹とともにタンチョウ、マナヅルを描く本作は長寿を象徴するものだが、「満八十」となった画家の作であることによっていっそうの吉祥性が強調されている。（福士雄也）

## 鉦鼓

**線刻銘　重源上人鉦鼓之写／享保十一丙午年五月十五日／東大寺大勧進沙門公俊**

鉦鼓とは梵音具の一種。勧進の際に僧が首から提げ、木槌で打ち鳴らしながら念仏を唱えて寄進を乞うた。本品は知恩寺の公俊が東大寺の勧進に従事した折、同寺に重源所持として伝わる重要文化財「鉦鼓」を忠実に模造して持ち帰ったもの。（末兼俊彦）

## 徳川家康像　天海賛

知恩寺には浄土宗を信仰した徳川将軍家の肖像画が複数伝わる。本図は初代将軍家康（一五四三～一六一六）が笏を手に坐す姿を描く。賛は他の家康像にも着賛例がある天海僧正（?～一六四三）のものとみられる。右下には第三十七世円誉上人（本展№9）が本図を作成したことが記される。「百萬遍知恩寺誌要」には、円誉上人が駿河西福寺に在籍したころ、家康の知遇を得てその肖像を描き、天海が着賛したという記事が掲載されている。（井並林太郎）

## 松蔭硯

**附後奈良天皇松蔭硯御文**

平清盛が愛用したと伝えられる硯で、南宋の皇帝より贈られたとされる。清盛の子の平重衡へと伝わり、その後、法然に託したとされる。石質から端渓石と混同されやすいが、中国・湖南省の瀟渓石で作られたものと思われる。この種の硯の中でも石質が細潤で、古くから作行きも優れたものとして著名である。「元気精英」と篆書で彫り込まれている。（降矢哲男）

## 日野勝光像

日野勝光（一四二九～七六）は室町時代の公卿。妹の富子を八代将軍足利義政の正室に入れ、権勢を誇った。本図の「文明八年五月二十五日」とは、勝光が左大臣に昇任した直後の日付である。（ただし、翌月には辞任し、薨去する。）絵は、将軍家と関係の深かった大和絵系絵師によるものと考えられる。なお、百萬遍は日野家の菩提所（『諸家知譜拙記』）。（井並林太郎）

## 蓮蒔絵経箱

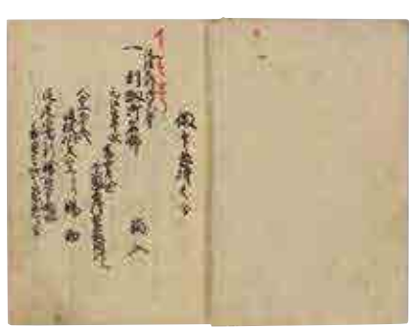
**幸阿弥又五郎作**

金銀で極楽浄土の蓮を描き、紐金具には仏法を象徴する輪宝をあしらう。経典や仏具をしまう箱だろう。底裏の銘文から作者と制作年が判かる。幸阿弥家は、室町将軍家に仕え、信長、秀吉にも認められ、江戸時代を通じて幕府の御用蒔絵師を勤めた。又五郎は未詳だが、本品は、近世初頭の京都における正統な蒔絵の基準作として貴重。（永島明子）

## 知恩寺歴代略伝（宝物録）

数種類がのこる知恩寺の宝物目録の一つ。二冊からなり、大書院ならびに小書院の寺宝を書きあげ、場合によっては関連する文書をも掲載する。同時期に作成されたと考えられる目録に、歴代住持および関連する人物の肖像の有無を調査し、賛のあるものには釈文を付す「頂相賛」（一冊）、歴代住持の紹介とあわせ伝来する文書を多く引用する「古文書」（二冊）がある。（羽田聡）

下冊



上冊

# 展示作品一覧

＊すべて京都・知恩寺蔵　◎は重要文化財

## 2F-1

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1 | | 善導大師立像 | 一躯 | 南北朝時代　十四世紀 |
| 2 | ◎ | 善導大師像 | 一幅 | 鎌倉時代　十三世紀 |
| 3 | | 浄土五祖像 | 一幅 | 鎌倉時代　十四世紀 |
| 4 | | 法然上人鏡御影 | 一幅 | 室町時代　十六世紀 |
| 5 | | 法然上人行状画図 巻第七 | 四八巻のうち一巻 | 江戸時代　享保十三年（一七二八） |
| 6 | | 知恩寺歴代略記 | 一巻 | 江戸時代　十七～十八世紀 |
| 7 | | 空円善阿上人像 | 一幅 | 江戸時代　十八世紀 |
| 8 | | 本誉上人像 | 一幅 | 江戸時代　十七世紀 |
| 9 | | 円誉上人像　木村了琢筆 | 一幅 | 江戸時代　寛永十五年（一六三八） |

## 2F-2

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 10 | ◎ | 仏涅槃図 | 一幅 | 鎌倉時代　十三世紀 |
| 11 | ◎ | 浄土曼荼羅図（当麻曼荼羅図） | 一幅 | 鎌倉時代　十三世紀 |
| 12 | | 阿弥陀浄土変相図 | 一幅 | 朝鮮半島・朝鮮時代　世宗十七年（一四三五） |
| 13 | | 阿弥陀如来立像 | 一躯 | 鎌倉時代　十二～十三世紀 |
| 14 | | 広疑瑞決集　巻第四　敬西房信瑞 | 一冊 | 鎌倉時代　十四世紀 |
| 15 | | 円覚経 | 二帖 | 中国・元時代　十三～十四世紀 |
| 16 | | 華厳経　巻第四十三 | 一巻 | 朝鮮半島・高麗時代　十三～十四世紀 |
| 17 | | 阿弥陀三尊像 | 一幅 | 朝鮮半島・高麗時代　十四世紀 |
| 18 | ◎ | 十体阿弥陀像　伝恵心（源信）筆 | 一面 | 鎌倉時代　十三世紀 |
| 19 | | 阿弥陀二十五菩薩来迎図　伝恵心（源信）筆 | 一幅 | 室町時代　十五世紀 |
| 20 | | 観経序分義図 | 一幅 | 鎌倉時代　十四世紀 |
| 21 | | 刺繍阿弥陀三尊来迎図 | 一幅 | 南北朝～室町時代　十四～十五世紀 |
| 22 | | 絵入阿弥陀経 | 一巻 | 中国・明時代　十五世紀 |

## 2F-3

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 23 | | 三千仏図　神田要信筆 | 三幅 | 江戸時代　元文四年～延享元年（一七三九～一七四四） |
| 24 | | 日野勝光像 | 一幅 | 室町時代　文明八年（一四七六） |
| 25 | | 徳川家康像　天海賛 | 一幅 | 江戸時代　十七世紀 |
| 26 | | 徳川秀忠像　尊純法親王賛 | 一幅 | 江戸時代　十七世紀 |
| 27 | | 徳川家光像　道恕賛 | 一幅 | 江戸時代　十七～十八世紀 |
| 28 | | 水月図　円山応挙筆　三宅嘯山賛 | 一幅 | 江戸時代　天明七年（一七八七） |
| 29 | | 双鶴図　高田敬輔筆 | 一幅 | 江戸時代　宝暦四年（一七五四） |
| 30 | ◎ | 蝦蟇鉄拐図　顔輝筆 | 二幅 | 中国・元時代　十四世紀 |

## 2F-5

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 31 | | 七難七福図巻 | 三巻のうち二巻 | 江戸時代　天明七年（一七八七） |
| 32 | | 鉦鼓 線刻銘 重源上人鉦鼓之写／享保十一丙午年五月十五日／東大寺大勧進沙門公俊 | 一口 | 江戸時代　享保十一年（一七二六） |
| 33 | | 円光大師輪光鏡 | 一面 | 江戸時代　元禄十年（一六九七） |
| 34 | | 松蔭硯 附後奈良天皇松蔭硯御文 | 一面（附一巻） | 中国・宋時代　十～十三世紀 |
| 35 | | 蓮蒔絵経箱　幸阿弥又五郎作 | 一合 | 桃山時代　慶長八年（一六〇三） |
| 36 | | 古文書 | 一巻 | 室町時代　十六世紀 |
| 37 | | 知恩寺歴代略伝（宝物録） | 二冊 | 江戸～明治時代　十九世紀 |

※展示場所は都合により変更となることがあります

# 関連土曜講座

## 8月25日〔土〕

### 「百萬遍知恩寺の歴史」

浄土宗大本山百萬遍知恩寺法主
福原隆善 氏

## 9月8日〔土〕

### 「京都の社寺と博物館 ―京都国立博物館による百萬遍知恩寺什物調査について―」

京都国立博物館主任研究員　呉 孟晋

※平成知新館 講堂にて13時30分～15時に開催。
定員200名、聴講無料
（ただし当日の観覧券等が必要）。
※当日12時より、平成知新館1階
グランドロビーにて整理券を配布し、
定員になり次第、配布を終了します。

〔表紙作品解説〕

### 重要文化財 蝦蟇鉄拐図 顔輝筆

大きなヒキガエルを肩に乗せ、桃の枝を手にした蝦蟇仙人と、鉄の杖を岩に掛けて分身を口から吐き出す鉄拐仙人の図像。怪異な表現は、細部にわたる写実的な描写のたまものである。筆者の顔輝は中国・元時代の院体系の画家で、字は秋月、廬陵（江西吉安）の人とされる。道釈人物や鬼神を得意にし、その画は八面生動するといわれた。

（呉 孟晋）

京都国立博物館　京都市東山区茶屋町527　075-525-2473（テレホンサービス）http://www.kyohaku.go.jp/